

インターネット上の攻撃行動と現実場面での 攻撃行動の規定因の差異

豊村美咲¹・長谷川晃²

(1: 東海学院大学大学院人間関係学研究科, 2: 東海学院大学人間関係学部)

要 約

インターネット上の攻撃行動と現実場面での攻撃行動の規定因の差異について検討を行った。大学生 205 名に、インターネット上の攻撃行動と対応するネット荒らし、現実場面での攻撃行動の 2 側面である外顕性攻撃と関係性攻撃、サディズム傾向、インターネットの使用時間、情報モラルに対する意識、および同調的対人態度を測定する質問紙に回答を求めた。ネット荒らし、外顕性攻撃、および関係性攻撃のそれぞれを従属変数とし、従属変数として投入しなかった他の攻撃行動の変数に加えて、攻撃行動の規定因の候補となる変数を独立変数とした重回帰分析を行った。その結果、ネット荒らしはサディズム傾向と正の関連が認められ、情報モラルに対する意識と負の関連が認められた。また、外顕性攻撃はサディズム傾向と正の関連が認められ、関係性攻撃は同調的対人態度と正の関連が認められた。以上のことから、攻撃行動の各下位次元は規定因が異なることが示唆された。

キーワード: ネット荒らし, 攻撃行動, サディズム, 情報モラルに対する意識, 同調的対人態度

問題と目的

攻撃行動は、他者に危害を加え、不利益を与える行動である(佐藤・高橋・杉山・境・嶋田, 2007)。攻撃行動は対人関係を悪化させる問題行動の 1 つであり、その規定因や低減方法について盛んに検討が行われている。

先行研究では、他者と対面して攻撃する行動(以下、現実場面での攻撃行動)が取り上げられることが多い(安藤他, 1999; 磯部・菱沼, 2007; 佐藤他, 2007)。例えば、磯部・菱沼(2007)は、相手への直接的な身体的・言語的な攻撃行動である外顕性攻撃と、陰口や、会話に入ってきた他者の無視といった、他者を介した間接的な攻撃行動である、関係性攻撃の 2 種類を測定する尺度を作成している。

しかし、インターネットの普及に伴い、近年ではインターネット上での攻撃行動が取り上げられている。その 1 つが、「インターネット上で他人を意図的に挑発し、争いや感情的な反応、コミュニケーションの分断を引き起こす欺瞞的で破壊的な行為」と定義されるネット荒らしである(Buckels et al., 2014; Hardaker, 2010)。

ネット荒らしを測定する尺度として、Global Assessment of Internet Trolling(GAIT)が挙げられる。本尺度は、ネット荒らし経験を尋ねる項目に加えて、ネット荒らしを楽

しむ程度、ネット荒らしとの一体感といったネット荒らしに関わる感情・態度を測定する項目から構成されている(Buckels et al., 2014)。しかし、GAIT を構成する項目は 4 項目のみであり、4 項目の尺度では、内容的妥当性という観点で問題があるという指摘がなされている(Field, 2013)。そのため、Sest & March (2017)は GAIT の項目を修正した上で、新たに 4 項目を追加した Global Assessment of Internet Trolling Revised(GAIT-R)を作成した。GAIT-R については、その日本語版も作成されている(増井・田村・マーチ, 2019)。

先行研究では、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の規定因が示唆されている。例えば、ネット荒らしとの強い関連が指摘されているパーソナリティ特性の 1 つが、サディズム傾向である。サディズム傾向とは、他者に苦痛を与えたり、他者の苦痛を見ることで興奮や快感を得る程度である(下司・小塩, 2016)。国内外で行われた先行研究において、サディズム傾向は GAIT や GAIT-R の得点と正の関連があることが確認されており(Buckels et al., 2014; 増井他, 2019; Sest & March, 2017)、その関連は、Dark Triad に含まれている他の特性の影響を統制した上でも認められている(Buckels et al., 2014; Sest & March, 2017)。サディズム傾向は現実場面での攻撃行動とも強い関連が認められており(Buckels, Jones, &

Paulhus, 2013), ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の両方の規定因であることが示唆される。

ネット荒らしは外顕性攻撃や関係性攻撃と正の相関が認められているが、その関連は弱い(それぞれ、 $r = .29, 13$; 増井, 2019)。そのため、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の規定因には、共通点に加えて相違点があることが予想される。また、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の規定因を検討する際には、その関連が疑似相関ではないことを確認するために、それぞれの攻撃行動の影響を統制した上で、規定因の候補との関連を検討することが望まれる。

そこで本研究では、大学生を対象とした調査を行い、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の 2 側面である、外顕性攻撃と関係性攻撃の規定因の差異について検討を行う。規定因の候補として、それぞれの攻撃行動との関連が既に確認されているサディズム傾向に加えて、パソコンと携帯電話でのインターネットの使用時間、情報モラルに対する意識、サディズム傾向、同調的対人態度、および、社会的スキルを取り上げる。このうち、パソコンと携帯電話でのインターネットの使用時間と情報モラルに対する意識は、ネット荒らしと特異的に関連しているのか検討するために含める変数であり、同調的対人態度と社会的スキルは、現実場面での攻撃行動と特異的に関連しているのか検討するために含める変数である。検証を行う仮説は、以下の通りである。

まず、サディズム傾向は日常場面において他者が苦しむ姿を喜ぶ傾向であるため(Paulhus & Dutton, 2016)、この傾向が強い者は、他者に苦痛を与えたり、他者の苦痛を見ることで喜びやすく、その喜びを得るために、インターネット上や現実場面で攻撃をする可能性が高いだろう。実際、前述の通り、サディズム傾向はネット荒らしや現実場面での攻撃行動と正の関連が認められている(Buckels et al., 2013, 2014; 増井他, 2019; Sest & March, 2017)。そのため、サディズム傾向とネット荒らし、および現実場面での攻撃行動の 2 側面には正の関連が認められることが予想される(仮説 1)。

情報モラルに対する意識とは、①他者への影響を考え、人権、知的財産権など自他の権利を尊重し、情報社会での行動に責任を持つこと、②危険回避など情報を正しく安全に利用できること、および、③コンピューターなどの情報機器の使用による健康との関わりを理解すること、という文部科学省(2008)が挙げた情報モラル教育の具体的な内容に対する意識である(宮川・森山, 2011)。情報モ

ラルに対する意識が低いと、インターネット上において他者に対する配慮がなく、他者の人権を尊重することができず、ネット上の危険回避も正しく安全に利用することができないと考えられる。そのため、情報モラルに対する意識とネット荒らしには負の関連が認められることが予想される(仮説 2)。

同調的対人態度とは、他者との関係を過剰に気にするあまり、「個」としての自己を主張することができず、本当の自分を押し殺してひたすら周囲に合わせる傾向である(大西, 2008)。同調的対人態度が強い者は、本心と違っていても、周りの人に合わせて同意してしまったり、自分が納得してなくても、仕方なく周りの人と合わせることが多いだろう。そのため、同調的対人態度が強い者は、友人が噂話や仲間外れなどをしていた場合に、それに合わせて振る舞いやすいため、関係性攻撃を行いやすくと考えられる。以上より、同調的対人態度と関係性攻撃には正の関連が認められることが予想される(仮説 3)。

なお、先行研究ではネット荒らしとインターネットの使用時間とに有意な相関が認められていない(増井他, 2019)。しかし、パソコンや携帯電話でインターネットを使用する時間と、インターネット上での攻撃行動とに正の関連を示した研究もある(内海, 2010)。パソコンと携帯電話でのインターネットの使用時間が長い者は、インターネット上で他者と接する機会が増え、他者の言動の粗を見ついたり、他者と衝突しやすくなる可能性がある。同様に、先行研究では現実場面での攻撃行動と社会的スキルにも有意な相関が認められなかったが(菊地・長谷川, 2020)、社会的スキルに長けている者は、相手を攻撃したり、仲間関係を操作して相手を傷つけるなどの対人関係が悪化するようなことをしないと考えられる。そのため、ネット荒らしとインターネットの使用時間や、現実場面での攻撃行動の 2 側面と社会的スキルとの関連について再検討を行う。

方法

調査対象者

東海地方にある 1 大学に在籍している大学学部生 220 名を対象とした。全調査対象者のうち、回答に不備があったものを除外した 205 名(男性 124 名、女性 81 名、平均年齢 19.86 歳、 $SD = 1.73$)を有効回答者とした。

質問紙の構成

日本語版 Global Assessment of Internet Trolling

Revised(増井・田村・マーチ, 2019) ネット荒らしの程度を測定する尺度である。全 8 項目に対して、「1.全くあてはまらない」から「5.非常によくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。以後、本尺度の合計得点を「ネット荒らし」と表記する。

攻撃性尺度(磯部・菱沼, 2007) 「外顕性攻撃」(身体的暴力や暴言など)と「関係性攻撃」(無視や仲間外れなど、仲間関係を操作する攻撃)という、現実場面での攻撃行動の 2 側面を測定する尺度である。全 28 項目に対して、「1.全くあてはまらない」から「5.非常にあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

日本語版 Varieties of Sadistic Tendencies(下司・小塩, 2016) サディズム傾向を測定する尺度である。全 16 項目に対して、「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」までの 5 件法で回答を求めた。以後、本尺度の合計得点を「サディズム傾向」と表記する。

インターネットの使用時間に関する質問項目(内海, 2010) パソコンと携帯電話について、平均的な 1 日あたりのインターネットの使用時間をそれぞれ尋ねた。以後、パソコンと携帯電話でのインターネットの使用時間をそれぞれ「パソコンでのネット使用時間」と「携帯電話でのネット使用時間」と表記する。

情報モラルに対する意識尺度(宮川・森山, 2011) 情報モラルに対する意識を測定する尺度である。本尺度は、「ICT 活用における危険回避に対する意識」、「個人情報保護に対する意識」、「情報機器使用における健康維持に対する意識」、「情報社会における犯罪防止に対する意識」、「ソフトウェアの不正コピーに対する意識」、および「ICT 活用における著作権に対する意識」の 6 下位尺度から構成される。全 20 項目に対して、「1.全く思わない」から「5.とてもそう思う」までの 5 件法で回答を求めた。以後、本尺度の合計得点を「情報モラルに対する意識」と表記する。

同調的対人態度尺度(大西, 2008) 同調的対人態度の程度を測定する尺度である。全 12 項目に対して、「1.全くあてはまらない」から「7.非常にあてはまる」までの 7 件法で回答を求めた。以後、本尺度の合計得点を「同調的対人態度」と表記する。

KISS-18(菊池, 1998) 社会的スキルを測定する尺度である。18 項目から構成され、「1.いつもそうでない」から「5.いつもそうだ」までの 5 件法で回答を求めた。以後、本尺度の合計得点を「社会的スキル」と表記する。

手続き

調査は 2020 年 11 月 19 日から 25 日までの期間に、大学の教室で行われた。授業の終了後に、受講者に対して調査への参加を依頼した。その際、調査への参加は任意であり、協力することで個人を特定することや成績に反映されることはないこと、回答の途中であっても不都合が生じた場合にはやめても構わないこと、調査のデータは数量化されるため、個人の特定や情報が公開される恐れはないことを説明した。これらの内容に同意した者に対して、質問紙に回答を求めた。

質問紙については、カウンターバランスをとるために、インターネットの使用時間に関する質問項目、攻撃性尺度、KISS-18、日本語版 Varieties of Sadistic Tendencies、情報モラルに対する意識尺度、同調的対人態度尺度、日本語版 Global Assessment of Internet Trolling Revised の順番で質問紙を綴じ込んだ冊子と、日本語版 Global Assessment of Internet Trolling Revised、情報モラルに対する意識尺度、日本語版 Varieties of Sadistic Tendencies、攻撃性尺度、KISS-18、インターネットの使用時間に関する質問項目の順番で綴じ込んだ冊子の 2 種類を配布した。本研究は、東海学院大学「人を対象とする研究」の承認を得た上でとり行われた(ID 番号: 2020-14)。

なお、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、調査が実施された大学では、2020 年の 4-5 月までと、8 月の一部の期間には、授業が休講となるか、あるいは遠隔授業の形式で実施された。それ以外の期間には、調査が実施された期間も含めて、感染症対策が取られた上で対面授業が行われた。

統計解析

以下では、Mplus 8.3 を用いて重回帰分析を実施し、それ以外の分析については IBM SPSS Statistics 23 を用いて実施した。変数間の単純な関連については、相関係数を算出して検討を行った。ネット荒らし、外顕性攻撃、および関係性攻撃と関連する要因を特定するために、重回帰分析を行った。欠損値については、相関分析ではペアワイズ法を用いて処理を行い、重回帰分析では完全情報最尤推定法を用いて処理を行った。

結果

Table 1 に各尺度の記述統計量を、Table 2 に尺度間の相関係数を示した。ネット荒らし、外顕性攻撃、および

Table 1 各尺度の記述統計量

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>	歪度	尖度
ネット荒らし	202	11.33	4.44	.84	1.69	2.18
外顕性攻撃	202	24.85	8.29	.68	0.77	-0.03
関係性攻撃	201	19.05	5.16	.76	0.10	-0.00
サディズム傾向	203	32.92	9.39	.75	0.65	-0.44
パソコンでのネット使用時間	204	1.18	1.66	—	1.54	1.55
携帯電話でのネット利用時間	204	3.91	1.67	—	-0.26	-1.02
ICT活用における危険回避に対する意識	204	21.09	3.70	.78	-1.31	2.43
個人情報保護に対する意識	204	22.50	3.16	.79	-1.36	1.08
情報機器使用における健康維持に対する意識	204	10.94	3.05	.83	-0.74	0.18
情報社会における犯罪防止に対する意識	204	10.62	2.37	.55	-0.43	0.10
ソフトウェアの不正コピーに対する意識	204	7.68	1.86	.56	-0.22	-0.99
ICT活用における著作権に対する意識	204	7.87	1.79	.40	-0.34	-1.02
情報モラルに対する意識	204	80.69	11.62	.88	-0.64	-0.22
同調的対人態度	201	32.33	7.73	.86	-0.37	-0.08
社会的スキル	203	53.26	12.39	.92	-0.05	0.70

関係性攻撃の間に正の有意な相関が認められた。ネット荒らしはサディズム傾向と正の有意な相関が認められ、情報モラルに対する意識の各下位尺度や合計得点と負の有意な相関が認められた。同様に、外顕性攻撃はサディズム傾向と正の有意な相関が認められ、情報モラルに対する意識の各下位尺度や合計得点と負の有意な相関が認められた。関係性攻撃はサディズム傾向や同調的対人態度と正の有意な相関が認められ、ソフトウェアの不正コピーに対する意識と負の有意な相関が認められた。

最後にネット荒らし、外顕性攻撃、および関係性攻撃を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数には、サディズム傾向、パソコンでのネット使用時間、携帯電話でのネット使用時間、情報モラルに対する意識、同調的対人態度、および社会的スキルを投入した。なお、情報モラルに対する意識については独立変数の数を減らすために、尺度の合計得点のみを使用した。また、ネット荒らし、外顕性攻撃、および関係性攻撃の間には正の相関が認められたことから、独立変数と従属変数の間に、他の従属変数が交絡要因となった疑似相関が認められることが予想された。そのため、ネット荒らしを従属変数とした重回帰分析を行う場合には、外顕性攻撃と関係性攻撃を独立変数に投入するといった形で、他の従属変数についても独立変数に投入した。分析の結果を Table 3 に示した。

ネット荒らしを従属変数とした分析の結果、外顕性攻撃とサディズム傾向の標準偏回帰係数が正の有意な値で

あり、情報モラルに対する意識の標準偏回帰係数が負の有意な値であった。次に、外顕性攻撃を従属変数とした分析の結果、ネット荒らし、関係性攻撃、およびサディズム傾向の標準偏回帰係数が有意であり、すべて正の値であった。最後に、関係性攻撃を従属変数とした分析の結果、外顕性攻撃と同調的対人態度の標準偏回帰係数が有意であり、共に正の値であった。

考察

以下では、基本的に重回帰分析の結果に基づき、変数間の関連について考察を行う。まず、サディズム傾向はネット荒らしや外顕性攻撃と正の関連が認められる一方、関係性攻撃とは無関連であり、仮説 1 は一部支持された。サディズム傾向とネット荒らしにおける正の関連については、同じ変数間に正の関連を見出した増井他(2019)の結果と一致する。また、サディズム傾向と外顕性攻撃における正の関連については、サディズムと現実場面での攻撃行動との間に正の関連を見出した Buckels et al. (2013)の結果と一致する。サディズム傾向は、他者に苦痛を与えたり、他者の苦痛を見ることで興奮や快感を得る程度である(下司・小塩, 2016)。サディズム傾向が高い者は、現実場面に加えて、インターネット上においても、喜びを得るために他者を攻撃しやすいのだと考えられる。

一方、サディズム傾向と関係性攻撃には有意な関連が

Table 2 尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. ネット荒らし							
2. 外顕性攻撃	.43						
3. 関係性攻撃	.20	.43					
4. サディズム傾向	.51	.48	.21				
5. パソコンでのネット使用時間	.01	.09	-.01	.21			
6. 携帯電話でのネット使用時間	-.08	.01	.09	-.04	.07		
7. ICT活用における危険回避に対する意識	-.51	-.39	-.06	-.46	-.06	.03	
8. 個人情報保護に対する意識	-.56	-.29	-.02	-.54	.00	.11	.60
9. 情報機器使用における健康維持に対する意識	-.21	-.23	-.02	-.28	-.18	-.12	.43
10. 情報社会における犯罪防止に対する意識	-.37	-.31	-.08	-.36	-.12	.03	.63
11. ソフトウェアの不正コピーに対する意識	-.35	-.21	-.14	-.30	-.11	.12	.40
12. ICT活用における著作権に対する意識	-.49	-.26	-.09	-.43	.01	.09	.61
13. 情報モラルに対する意識	-.58	-.40	-.08	-.56	-.11	.05	.88
14. 同調的対人態度	-.09	-.01	.20	-.06	.07	.08	.11
15. 社会的スキル	-.06	-.06	-.13	.03	.00	-.11	.12

	8	9	10	11	12	13	14
1. ネット荒らし							
2. 外顕性攻撃							
3. 関係性攻撃							
4. サディズム傾向							
5. パソコンでのネット使用時間							
6. 携帯電話でのネット使用時間							
7. ICT活用における危険回避に対する意識							
8. 個人情報保護に対する意識							
9. 情報機器使用における健康維持に対する意識	.23						
10. 情報社会における犯罪防止に対する意識	.33	.55					
11. ソフトウェアの不正コピーに対する意識	.42	.15	.27				
12. ICT活用における著作権に対する意識	.58	.21	.40	.42			
13. 情報モラルに対する意識	.75	.63	.74	.56	.71		
14. 同調的対人態度	.07	.04	.05	.03	.06	.09	
15. 社会的スキル	.00	.27	.26	-.06	.05	.16	-.36

※5%水準で有意な相関係数を太字で示した。

認められなかった。関係性攻撃は、仲間外れや無視といった、仲間関係を介して相手を傷つける行為であり(磯部・菱沼, 2007), 他者を直接傷つける行動ではない。サディズム傾向が高い者が他者を直接攻撃した場合には、相手が苦しむ姿をすぐに見て喜びを感じる事が可能だが、仲間関係を介して他者を攻撃する場合には、相手が苦しむ姿を見られるとは限らない。そのため、サディズム傾

向が高い者でも、関係性攻撃を行おうとする動機づけが高まらないのだと考えられる。

次に、情報モラルに対する意識とネット荒らしに負の関連が認められ、仮説2が支持された。情報モラルに対する意識とは、①他者への影響を考え、人権、知的財産権など自他の権利を尊重し、情報社会での行動に責任を持つこと、②危険回避など情報を、正しく安全に利用でき

インターネット上の攻撃行動と現実場面での攻撃行動の規定因の差異

Table 3 重回帰分析の結果(すべて $n = 205$)

独立変数	従属変数		
	ネット荒らし	外顕性攻撃	関係性攻撃
ネット荒らし	—	.16 *	.07
外顕性攻撃	.15 *	—	.42 **
関係性攻撃	.05	.34 **	—
サディズム傾向	.25 **	.25 **	.10
パソコンでのネット使用時間	-.09	.03	-.07
携帯電話でのネット使用時間	-.05	.01	.07
情報モラルに対する意識	-.38 **	-.14	.15
同調的対人態度	-.05	-.03	.18 **
社会的スキル	-.02	.00	-.05
R^2	.43 **	.40 **	.25 **

※ R^2 以外の数値は標準偏回帰係数を示している。** $p < .01$, * $p < .05$.

ること、および、③コンピューターなどの情報機器の使用による健康との関わりを理解すること、という文部科学省(2008)が挙げた情報モラル教育の具体的な内容に対する意識である(宮川・森山, 2011)。情報モラルに対する意識が低いと、インターネット上において他者に対する配慮がなく、他者の人権を尊重することができず、ネット上の危険回避も正しく安全に利用することができないために、ネット荒らしをする傾向が高いのだと考えられる。

次に同調的対人態度と関係性攻撃に正の関連が認められ、仮説 3 は支持された。同調的対人態度が強い者は、本心と違っていても、周りの人に合わせて同意してしまったり、自分が納得していなくても、仕方なく周りの人と合わせたりする傾向が高いだろう。そのため、同調的対人態度が強い者は、友人が噂話や仲間外れなどをしていた場合に、それに合わせて振る舞いやすいため、関係性攻撃を行いやすいのだと考えられる。

なお、本研究では、相関分析と重回帰分析の両方で、ネット荒らしとパソコンや携帯電話でのインターネット使用時間に有意な関連が認められなかった。この結果は、ネット荒らしとインターネットの使用時間とに有意な相関が認められなかった増井他(2019)の結果と一致する。内海(2010)が行った調査の結果、パソコンや携帯電話でインターネットを使用する時間と、インターネット上での攻撃行動とに正の関連が認められているが、この調査では、ネット荒らしが測定されていない点、中学生という低い年齢の参加者が対象とされている点、および、調査の実施時期が 2007 年と、増井他(2019)や本研究よりも 10 年以上前に実施された点が異なっている。その

ため、本研究の実施時には、ネット荒らしがインターネットの使用時間と関連がないことが示唆される。近年では、オンラインショッピングといった、書き込みを伴わないインターネットの使用も一般的になっているため、インターネットの使用時間が必ずしもネット荒らしに結びつかないのだと考えられる。

また、本研究では、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動は共に社会的スキルと有意な関連が認められなかった。外顕性攻撃と関係性攻撃が社会的スキルと無関連であったという本研究の結果は、菊地・長谷川(2020)の結果と一致した。少なくとも磯部・菱沼(2007)が作成した攻撃性尺度の 2 下位尺度については、社会的スキルと無関連であると結論づけられる。KiSS-18 には、攻撃行動に代わるスキルに関する項目が含められているが、多くの項目は、他者の会話に加わったり、他者と円滑に会話を行うといった、葛藤場面における行動とは関連しない行動を測定している(菊池, 1998)。そのため、本研究ではネット荒らしに加えて、現実場面での攻撃行動も社会的スキルと有意な関連が認められなかったものと考えられる。

本研究では、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動の規定因の違いについて検討を行った。その結果、ネット荒らしについては情報モラルに対する意識とサディズム傾向が、外顕性攻撃についてはサディズム傾向が、関係性攻撃については同調的対人態度が規定因であることが示唆された。ネット荒らしは、他の 2 つの攻撃行動と比較して、情報モラルに対する意識と関連している点が特徴として挙げられる。一方、外顕性攻撃は、サディズム傾向と関連する点がネット荒らしと共通していた。関係

性攻撃は、ネット荒らしや外顕性攻撃と異なり、同調的対人態度と関連する点に特徴があることが示唆された。

本研究の結果、ネット荒らしと情報モラルに対する意識に負の関連が認められた。そのため、情報モラルに対する意識を高めることにより、ネット荒らしを減少できると考えられる。情報モラルに対する意識を高めるためには、小学校、中学校、高等学校、および高等教育機関の各学校段階で何度も情報モラル教育を受ける機会を作ることが有効だろう。

一方、本研究の結果、外顕性攻撃がサディズム傾向と関連する一方、関係性攻撃が同調的対人態度と関連することが示され、現実場面での攻撃行動の2側面の規定因が異なることが示唆された。本研究で用いた攻撃性尺度(磯部・菱沼, 2007)の関係性攻撃は、友人関係満足感と正の関連が認められており(菊地・長谷川, 2020), 対人関係を悪化させる行動を反映していない可能性がある。しかし、関係性攻撃に、外顕性攻撃とは異なる不適応性があるのならば、現実場面での攻撃行動の各側面を改善するために、異なる介入を行うことが必要となるかもしれない。個々人の攻撃行動の特徴に合わせた介入プログラムを開発するために、インターネット上での攻撃行動も含めて、攻撃行動の各側面の規定因を特定する更なる検討を積み重ねることが望まれる。

本研究には以下の限界点がある。まず、本研究は対象者がすべて大学生であるため、発達段階によって変数間の関連に違いがあるのか検討を行っていない。文部科学省(2008)の統計によると、中学生のネットいじめの認知件数は8%であり、高校生は20%であった(文部科学省, 2008)。中学生と高校生においてネットいじめの認知件数に差があるため、大学生においても他の学校段階と差がある可能性がある。さらに、学校段階によって情報モラル教育を扱った授業にも差があり、また学校の中での携帯電話の使用制限にも差があると考えられる。今後は各学校段階で、本研究で取り上げた変数の得点に差があるのかを検討するのに加えて、学校段階で変数間の関連に差がないか検討することが求められる。

次に、本研究では、インターネット上での攻撃行動自体を測定していないため、インターネット上と現実場面における攻撃行動に関する厳密な比較を行うことができなかった。先行研究では、インターネット上での攻撃行動を測定する標準化された尺度が作成されていない。そのため、インターネット上での攻撃行動を測定する尺度を作成した上で、ネット荒らしと現実場面での攻撃行動

の規定因の差異について検討することが望まれる。

また、本研究では1時点ですべてのデータを取得したため、変数間の因果関係については定かでない。縦断研究といった因果関係の特定に繋がる手法を用い、攻撃行動の各側面の規定因を検討することが求められる。

さらに、本研究ではパソコンと携帯電話について、平均的な1日あたりのインターネットの使用時間を尋ねただけであり、具体的な利用内容を問う質問紙を用いなかった。そのため、他者とのコミュニケーション、ニュースの閲覧、情報検索、ゲームでの使用、およびSNSの使用といった、インターネットの各使用方法がネット荒らしと関連しているのか検討を行うことができなかった。今後は、具体的な使用方法を問う質問紙を加えることにより、ネット荒らしと関連するインターネットの使用方法を特定できるかもしれない。

最後に、本研究でネット荒らしと現実場面での攻撃行動の規定因について検討を行ったが、規定因の候補は、本研究で取り上げたもの以外にもある。例えば、増井他(2019)は、ネット荒らしとセルフコントロールや、共感性の下位側面である共感的関心とに負の有意な関連があることを示した。このことから、共感的関心やセルフコントロールの低さがネット荒らしの規定因である可能性がある。そのため、ネット荒らしや現実場面での攻撃行動の規定因となることが予想される他の変数を加えた上で、さらなる検討を行う必要がある。

引用文献

- 安藤 明人・曾我 祥子・山崎 勝之・島井 哲志・嶋田 洋徳・宇津木 成介...坂井 明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Buckels, E. E., Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2013). Behavioral confirmation of everyday sadism. *Psychological Science*, 24, 2201-2209.
- Field, A. (2013). *Discovering statistics using IBM SPSS statistics* (4th ed.). London: Sage Publications.
- 磯部 美良・菱沼 悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連——印象形成の観点から—— パーソナリティ研究, 15, 290-300.
- 菊地 勇太・長谷川 晃 (2020). 共感性が社会的スキル, 攻撃性, および友人関係満足感を介して抑うつに与える影響 東海学院大学紀要, 14, 31-40.

インターネット上の攻撃行動と現実場面での攻撃行動の規定因の差異

- 増井 啓太・田村 紋女・マーチ, エヴィータ (2019). 日本語版ネット荒らし尺度の作成. *心理学研究*, *89*, 602-610.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説 総則編 株式会社ぎょうせい
- 宮川 洋一・森山 潤 (2011). 道徳的規範意識と情報モラルに対する意識との関係——中学校学習指導要領の解説「総則編」に示された情報モラルの考え方に基づいて—— *日本教教育工学論文誌*, *35*, 73-82.
- Paulhus, D. L., & Dutton, D. G. (2016). Everyday sadism. In V. Zeigler-Hill & D. K. Marcus (Eds.), *The dark side of personality: Science and practice in social, personality, and clinical psychology* (pp. 109-120). Washington, DC : American Psychological Association.
- 大西 将史 (2008). 同調的対人態度尺度の作成. *日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集*, 343.
- 佐藤 寛・高橋 史・杉山 恵一・境 泉洋・嶋田 洋徳 (2007). 攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. *行動療法研究*, *33*, 33-44.
- Sest, N., & March, E. (2017). Constructing the cyber-troll: Psychopathy, sadism, and empathy. *Personality and Individual Differences*, *119*, 69-72.
- 下司 忠大・小塩 真司 (2016). 日本語版 Varieties of Sadistic Tendencies (VAST-J)の作成——因子構造および HEXACO との関連性—— *日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会発表論文集*, 109.
- 内海 しょか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験——親の統制に対する子どもの認知, および関係性攻撃との関連—— *教育心理学研究*, *58*, 12-22.

Difference in determinants of aggressive behaviors on the internet and in real life

TOYOMURA Misaki¹ & HASEGAWA Akira²

¹Graduate School of Human Relations, Tokai Gakuin University

²Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University

Abstract

We examined differences between determinants of aggressive behaviors on the internet and in real life. Undergraduate students (N = 205) completed self-report measures assessing internet trolling corresponding to aggressive behaviors on the internet, overt and relational aggression corresponding to aggressive behaviors in real life, sadism, time spent on the internet, information morality consciousness, and conformable interpersonal attitudes. Regression analyses were conducted with internet trolling, overt aggression, and relational aggression as dependent variables, candidate determinants of aggressive behaviors as independent variables, and subdimension of aggressive behaviors not entered as a dependent variable in each model as covariates. Results indicated that internet trolling was positively associated with sadism and negatively associated with information morality consciousness. Moreover, overt aggression was positively associated with sadism, whereas relational aggression was positively associated with conformable interpersonal attitudes. These findings suggested that each subdimension of aggressive behaviors has different determinants.

Keywords : internet trolling, aggressive behavior, sadism, consciousness of information morality, conformable interpersonal attitude